

TOP 30th Anniversary

Yebisu International Festival for
Art & Alternative Visions 2025

15 DAYS

PROJECT Project Description Date Project Contacts Documents enclosed Notes

DOCS:

Images
and Records

31 Jan — 16 Feb 2025

総合開館30周年記念 恵比寿映像祭2025 Docs —これはイメージです—

恵比寿映像祭2025は、2025年に総合開館30周年を迎える東京都写真美術館をメイン会場に、あらためてメディアの変容を考察するとともに、19世紀から現代までの多様な表現を紹介し、言葉とイメージの問題をひも解きます。

総合開館30周年記念

恵比寿映像祭2025 総合テーマについて

「Docs —これはイメージです—」

Docs: Images and Records

東京都／公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館／日本経済新聞社は2025年1月31日（金）～2月16日（日）の15日間にわたり、東京都写真美術館をメイン会場に、恵比寿ガーデンプレイス各所などで「総合開館30周年記念 恵比寿映像祭2025 Docs —これはイメージです—」を開催します。この度の恵比寿映像祭では、メディアの変容に着目し、幅広い作品群をイメージと言葉からひも解くことで、「ドキュメント／ドキュメンタリー」の再考を試みます。

ドキュメント（document）は書類や文書を意味し、事実に基づく情報の記録（言葉はもとより写真・映像などのイメージを含む）を指します。そして、これを形容詞化したドキュメンタリー（documentary）という言葉はドキュメント的という形容詞の語義だけでなく、記録映画という名詞の意味も含まれます。

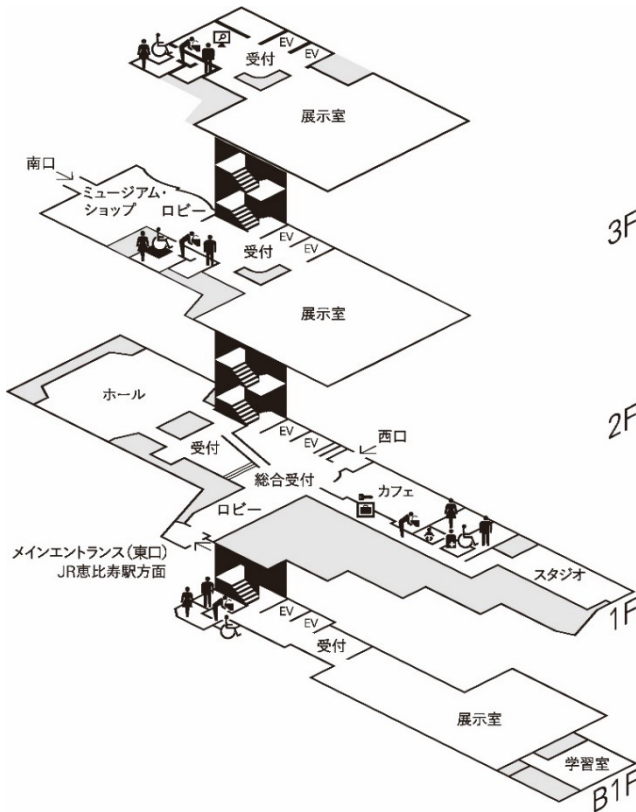
実写映画の起点がリュミエール兄弟による、工場から出てくる人々を記録した《工場の出口》（1895年）であることはよく知られています。公開時、人々は日常で目にする光景が、実際の出来事のように、眼前に記録・再生されることに驚愕しました。この発明から130年を経た現在、誰もが写真や映像で生活を記録し、共有することが当たり前になっています。また、写真は画像へ、映像は動画へ、いわば制御可能なデジタルデータへと拡張し、事実とそれを表すイメージとの関係はより複雑で曖昧なものになっているのではないのでしょうか。

「総合開館30周年記念 恵比寿映像祭2025」では、東京都写真美術館の館内全フロアにおいて、国内外で活躍するアーティストによる映像、写真、資料などのパフォーマンスや身体性に関連する作品群、さらに第2回目となる「コミッション・プロジェクト」のファイナリストによる新作、東京都コレクションの展示および上映、パフォーマンス、ライブ、トーク、ワークショップなどのプログラムを通して、19世紀から現代にいたるさまざまな表現を紹介し、時間を記録することに焦点をあてながらアーカイヴを掘り下げ、言葉とイメージの問題をひも解きます。

また、手話通訳付きトークや鑑賞サポートをより充実させ、多様な背景を持つ来場者一人ひとりが文化や表現に出会う環境をつくります。そして、恵比寿ガーデンプレイス各所で展開するオフサイト展示では、テーマに寄り添った作品を体験できる場を創出し、恵比寿地域の文化関連施設と連携して広がりある豊かな芸術文化が享受できる場を提供します。

構成 | 展示や上映、トークやイベントなど、多種多彩なプログラムを開催！

※詳細プログラムは1月上旬に発表予定です。



・コミッション・プロジェクト (3F展示室)

国際的な発信および新しい文化価値の醸成を目的に、恵比寿映像祭2023から始まった制作委嘱事業が「コミッション・プロジェクト」。恵比寿映像祭2025では、昨年度決定した4名のファイナリスト小田香、小森はるか、永田康祐、牧原依里による新作を発表。

・展示 (2F・B1F展示室)

ドキュメンタリーの視点から写真や映像を主とした様々な表現を展示し、「ドキュメント/ドキュメンタリー」を、言葉とイメージの関係性を通して再考します。トニー・コークス^{リウユー}や劉玓による日本初公開作品、東京都コレクションからウィリアム・ヘンリー・フォックス・タルボットや藤幡正樹、杉本博司など国内外の多様な作品を紹介。

・上映 (1Fホール)

コミッション・プロジェクトのファイナリストの過去作品など、総合テーマと呼応する特別上映プログラムを連日お届けします。

・シンポジウム/スペシャルトークセッション (1Fホール)

総合テーマ「Docs —これはイメージです—」や映像アーカイヴを掘り下げるシンポジウムやトーク・セッションを行い、多彩な登壇者を迎えて開催します。

・ライヴ・イベント (1Fホール・展示室ほか)

東京都写真美術館1階ホールや各展示室を会場に、従来の映像の枠を超えたパフォーマンスを行います。

・地域連携プログラム (地域連携各所)

恵比寿近隣の地域で活動するアートの担い手がそれぞれの施設で選りすぐりの展覧会のほか多彩なイベントを開催します。また同時に各施設をめぐるシールラリーを通じて、フェスティバルを楽しむきっかけをつくります。

・教育普及プログラム (1Fスタジオほか)

ワークショップ、トークなど、恵比寿映像祭をより身近に、より深く楽しんでいただくため、さまざまなプログラムを用意します。

・オフサイト展示 (恵比寿ガーデンプレイス各所)

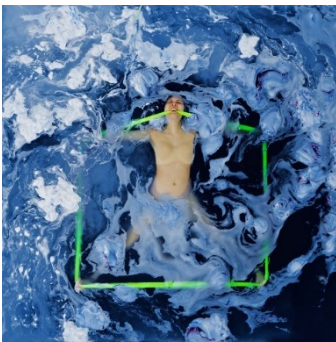
テキスト、音楽、映像の断片の再文脈化による独自の視覚表現で知られるトニー・コークスの作品をはじめとして、美術館から作品が飛び出し、恵比寿ガーデンプレイスの各所で展開します。

社会共生の取り組み

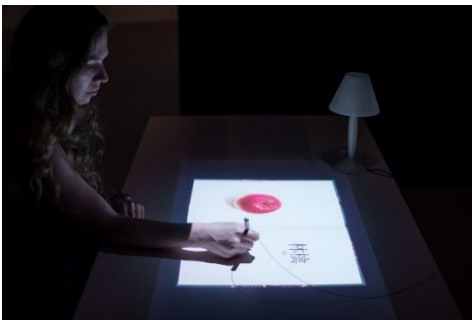
東京都写真美術館はどなたにも恵比寿映像祭2025を楽しんでいただけるよう、手話通訳付きトークや鑑賞サポートをより充実させ、アクセシビリティの向上に取り組んでいます。アクセシビリティとは、「利用できること」。身体の機能や認知の特性にかかわらず、その人の行きたい、見たい、知りたい、使いたいなどのニーズが満たせることを目指しています。

・恵比寿映像祭2025の参加アーティストについて

「総合開館30周年記念 恵比寿映像祭2025」は、総合テーマ「Docs—これはイメージです—」のもと、独自の視覚表現によって文化や歴史を再文脈化するメディア・アーティストのトニー・ヨークス（アメリカ）による日本初公開作品群が美術館内各所やオフサイト会場場で展示されるほか、アジアからは、^{リウユー}劉玓（台湾）によるビデオと空間インスタレーション作品、本年ヴェネツィア・ビエンナーレで発表されたカウィータ・ヴァタナジャンクル（タイ）による映像作品、アーカイヴおよびフィールド・リサーチを通じて支配的なナラティヴに挑戦するプリヤギータ・ディア（シンガポール）によるメディア作品が展覧されます。角田俊也による新作映像インスタレーションやフィルム表現の可能性を追求する斎藤英理、2021年に他界し、セクシュアリティ表現と闘い続けたパフォーマンス・アーティスト、イトー・タリーのアーカイヴ展示からテーマを掘り下げ考察します。



カウィータ・ヴァタナジャンクル
《A Symphony Dyed Blue》2021年
作家蔵
Courtesy the artist and Nova
Contemporary



藤幡正樹 《Beyond Pages》1995年 東京都写真美術館蔵
“Masaki Fujihata: Augmenting the World,” LAZNIA Centre for
Contemporary Art exhibition, Gdańsk 2017, Photo: Paweł Józwiak



トニー・ヨークス 《The Queen is Dead ... Fragment 2》インスタレーション風景
（ローマ現代美術館[MACRO]）2021年 作家蔵 Courtesy the artist, Greene Naftali,
New York, Hannah Hoffman, Los Angeles, and Electronic Arts Intermix, New York.
Photo: Simon d'Exéa. [参考図版]

東京都コレクションからは、ウィリアム・ヘンリー・フォックス・タルボット、ジュリア・マーガレット・キャメロン、杉本博司などの写真作品、修復を施した古川タク、藤幡正樹のメディア作品展示など、国境や時代を超える魅力あるラインナップが展示されます。本映像祭では、「ドキュメント／ドキュメンタリー」再考の視点から写真や映像を主とした様々な表現を展示し、言葉とイメージの関係性を通して再考します。コレクション作品も総合テーマに即してセレクトし、奥行きのある展示を実現します。そして、3月23日まで継続して展示を行う3階展示室では、第2回「コミッション・プロジェクト」で選出された4名のファイナリストによって恵比寿映像祭2025のために制作された作品群を展示します。小田香は、イメージと音を介して「人間の記憶のありか」について探求する作品を展開し、小森はるか、独自の方法で記憶を伝承するドキュメンタリーの在り方を考える作品を出品します。永田康祐は、食や植民地の歴史の研究に基づいて、さまざまな語りが交錯する複合的な作品を出品し、ろう者である牧原依里は、身体感覚の視点から作品制作に取り組み、映像の実験的な手法を提示します。ファイナリストそれぞれの個人的、社会的、歴史的な背景や問題意識を通して「ドキュメント／ドキュメンタリー」を探ります。

主な参加アーティスト一覧（2024年11月19日現在） ※姓のアルファベット順記載

	アーティスト名		活動拠点	新作 ● 日本初出展 ○ 東京都コレクション ■
	日	英		
1	ジュリア・マーガレット・キャメロン	Julia Margaret CAMERON	イングランド	■
2	トニー・コクス	Tony COKES	アメリカ	○
3	プリヤギータ・ディア	Priyageetha DIA	シンガポール	○
4	藤幡正樹	FUJIHATA Masaki	日本	■
5	古川タク	FURUKAWA Taku	日本	■
6	イトー・ターリ	ITO Tari	日本	
7	劉玕	LIU Yu	台湾	
8	斎藤英理	SAITO Eri	日本	
9	杉本博司	SUGIMOTO Hiroshi	日本	■
10	ウィリアム・ヘンリー・フォックス・タルボット	William Henry Fox TALBOT	イングランド	■
11	角田俊也	TSUNODA Toshiya	日本	●
12	カウィータ・ヴァタナジャンクール	Kawita VATANAJYANKUR	タイ	
第2回コミッション・プロジェクト				
1	小森はるか	KOMORI Haruka	日本	●
2	牧原依里	MAKIHARA Eri	日本	●
3	永田康祐	NAGATA Kosuke	日本	●
4	小田香	ODA Kaori	日本	●

主な参加アーティスト（展示・上映）

トニー・コークス

Tony COKES



トニー・コークス インスタレーション風景、2023-2024年 (Dia Bridgehampton, ニューヨーク) Courtesy the artist, Dia Art Foundation, New York, and Greene Naftali, New York. Photo: Bill Jacobson Studio, New York [参考図版]

歴史的および文化的瞬間を再文脈化する映像作品やインスタレーションを制作するメディア・アーティスト。1980年代以降、コークスの作品は、大衆文化に潜在するイデオロギーを浮き彫りにし、構造的な人種差別、権力、可視性などといった問題に取り組んできた。その緻密に構成されたビデオ・エッセイは、既存のテキストを鮮やかな色彩と不協和音のサウンドトラックの上に重ね、感覚的なズレを利用して、作品体験をより複雑なものへ深めようとしている。アメリカ・ロードアイランド州プロビデンス在住。ブラウン大学現代文化・メディア学部教授。2024年にマッカーサー財団フェローシップ、2022年から2023年に、ローマ賞を受賞。2022年、ミュンヘンのハウス・デア・クンストとクンストフェラインが共同開催の大規模な展覧会に参加。その他、最近の個展には、Dia Bridgehampton（ニューヨーク州ブリッジハンプトン、2023-2024年）などがある。

プリヤギータ・ディア

Priyagetha DIA



プリヤギータ・ディア
 《The Sea is a Blue Memory》2022年

タイム・ベースド・メディアとインスタレーションを実践とするプリヤギータ・ディアは、東南アジアの労働史、熱帯地域への考察、そして祖先の記憶と機械の論理をテーマに、それらが絡み合う作品を制作している。アーカイブおよびフィールド・リサーチを通じて、ノンリニア性及び支配的なナラティヴを拒絶する実践を探求している。近年の展覧会には、Manifesta 15（バルセロナ、2024年）、第60回ヴェネツィア・ビエンナーレ（ヴェネツィア、2024年）、Arts House（メルボルン、2024年）、Diriyah Biennale（サウジアラビア、2024年）、Frieze Seoul（ソウル、2023年）、シンガポール美術館（シンガポール、2023年）、Kochi-Muziris Biennale（ケーララ、2022年）、La Trobe Art Institute（オーストラリア、2022年）、National Gallery Singapore（シンガポール、2020年）、Art Science Museum（シンガポール、2019年）がある。2022年にはNTU Centre for Contemporary Art Singapore（シンガポール）で、また2023年にはSEA AiR—Studio ResidenciesによるJan van Eyck Academie（オランダ）でのアーティスト・イン・レジデンスの実績がある。

劉玓

LIU Yu



劉玓（リウ・ユ）《If Narratives Become the Great Flood》2020年

1985年台湾生まれ。主にビデオと空間インスタレーションを創作の媒体とする劉玓は、ドキュメントの調査に基づくフィールド・スタディを、ある種の方法論として自身の芸術実践に結びつけることで、内在し、絡み合った複数のナラティヴを再構築する。断片化された空間、歴史、イメージ、物語を統合することで、劉玓はこれらナラティヴに密接なつながりを持たせ、補完するプロジェクトを展開している。最近の個展には、国立台湾美術館での「Ladies」（台中、2023年）や、洪建全基金會/Project Seekでの「If Narratives Become the Great Flood」（台北、2020年）がある。グループ展には、長征空間での「Expeditionary Botanics」（北京、2024年）、The Brooklyn Rail Industry Cityでの「Singing in Unison Part 8: Between Waves」（ニューヨーク、2023年）、ACCでの「Aqua Paradiso」（光州、2022年）、および国立台湾美術館での「Asian Art Biennial: Phantasmopolis」（台中、2021年）がある。

カウィータ・
 ヴァタナジャンクール

Kawita VATANAJYANKUR



カウィータ・ヴァタナジャンクール
 《The Toilet》2020年

1987年生まれ。2011年にRMIT大学で学士（ファインアート）を取得。タイはバンコクを拠点に活動するヴァタナジャンクールは、メディアおよびパフォーマンスを実践とするアーティストである。自身の身体を用いることで女性性、労働、消費主義の交差性を探り、そこに立ち向かう。家事/生活用具や工具の反復的で過酷なタスクを自身が担うことで、人間と機械を融合させ、サイボーグとしての役割を体現している。最近のグループ展には、シンガポール美術館での「Everyday Practices」（シンガポール、2024年）、ヴェネツィア・ビエンナーレでの「The Spirits of Maritime Crossing」（ヴェネツィア、2024年）、Jut Art Museumでの「Dasein: Born to be Human」（台北、2023年）、MOCAでの「Uncanny World」（釜山、2022年）などがある。

イトー・タリー

ITO Tari



イトー・タリー《ひとつの応答—ベ・ボンギさんと数えきれない女たち》(2012年12月「アジアをつなぐ—境界を生きる女たち1984-2012」展沖縄県立博物館・美術館) パフォーマンス使用画像より[参考図版] 写真提供: タリーの会

1951年東京都生まれ、2021年死去。1969年、学生運動など社会運動が活発化した時代に、和光大学芸術学科に入学し、身体が介入する表現に関心を持ち、パントマイムを始める。1982年から1986年にオランダでパフォーマンスを学んだ。同時期からフェミニズムやセクシュアル・マイノリティの人権について考え始め、1996年、パフォーマンス《自画像》でレズビアンであることをカミングアウトし、公演を続けた。ウイメンズ・アート・ネットワーク(WAN)を設立し、2000年には「越境する女たち21」展を実施。2003年には早稲田にパフォーマンス・アートとフェミニズムが交差する空間「PA/F SPACE」を創設し、セクシュアル・マイノリティに関するイベントをはじめ、多くの人に利用された。2021年筋萎縮性側索硬化症(ALS)により死去。

藤幡正樹

FUJIHATA Masaki

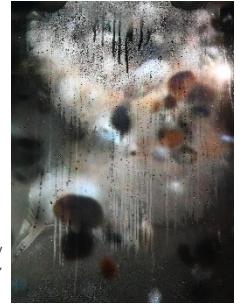


藤幡正樹《Beyond Pages》1995年 東京都写真美術館蔵 *Masaki Fujihata: Augmenting the World, LAZANIA Centre for Contemporary Art exhibition, Gdańsk 2017, Photo: Paweł Józwiak

メディア・アーティスト。1956年東京生まれ。80年代は主にCGを扱った作品の制作、90年代はインターネットやGPSなどの先端テクノロジーに取り組む。96年には《Global Interior Project #2》でアリス・エレクトロニカのゴールデン・ニカを受賞。インタラクティブな書物をテーマにした《Beyond Pages》は1995年以降世界数十ヶ所で展示された。1992年の《生け捕られた速度》から2012年の《Voices of Aliveness》へと続く「Field-Works」シリーズでは動画にGPSによる位置情報を付加することで仮想空間と現実空間をつなぎ、記録と記憶の新しい可能性を多数の作品群へと展開。2016年には、70年代から現在までの主要作品をARで見ることのできるアーカイブ本『anarchive#6 Masaki Fujihata』をフランスで出版。2018年の香港での《BeHere Hong Kong》に続いて、残された写真を参照しつつ、その時代の人々の営みをARを用いて現在に再現するプロジェクトの最新版《BeHere /1942》では、1942年に西海岸で起きた日系人強制収容をテーマにした展示を、2022年にロサンゼルスのみ日系人博物館で開催した。

角田俊也

TSUNODA Toshiya



角田俊也《スクリーニング vol.1》2024年「写真鉱山 / スクリーニング vol.1」(スプラウト・キュレーション企画)より[参考図版]

1964年神奈川県生まれ。1992年東京藝術大学大学院美術研究科修了。フィールド録音による音源制作と並行して映像やインスタレーションなどを手がける。主な展示に「写真鉱山 / スクリーニング vol.1」(スプラウト・キュレーション企画、The White、東京、2024年)、「風景と声」(外、京都、2021年)、「トランス／リアル—非実体的美術の可能性 vol.5 伊東篤宏・角田俊也 | Transmission / Sound」(gallery αM、東京、2016年)、「Soundings: A Contemporary Score」(ニューヨーク近代美術館、2013年)、「Leader As Gutter Luke Fowler & Toshiya Tsunoda」(タカ・イシイギャラリー、東京、2013年)など。

古川タク

FURUKAWA Taku



古川タク《ニッケル・オデオン・動画劇場》1988年 東京都写真美術館蔵

1964年、久里実験漫画工房に入社。和田誠、横尾忠則らのアニメーション制作を手伝う。1969年、《牛頭》がアヌシー国際アニメーション映画祭に入選。1975年には同アヌシー映画祭で《驚き盤》が審査委員特別賞を受賞。シンプルな画風とユーモラスな世界観が国際的な評価を受けている。活動領域は、アニメーション、イラストレーション、漫画、絵本と多岐に渡る。2024年、作品集『TAKUPEDIA』が第53回日本漫画家協会賞カーตูน部門の大賞を受賞。

斎藤英理

SAITO Eri



斎藤英理《Social Circles》2023年

1991年福島県生まれ。記憶や認識など目に見えない不確かな動態をモチーフに、主に映像メディアを用いて制作を行う。主な展覧会に「how to make friends」(Art Center Ongoing、東京、2023年)、「暗くなるまで待っていて」(東京都美術館、2021年)など。上映には21st Experimental Film & Video Festival in Seoul (韓国映像資料院、ソウル、2024年)、Prismatic Ground (アンソロジー・フィルム・アーカイヴス、ニューヨーク、2024年)など。2024年1月にニューヨークで開催されたe-flux Film AwardにてSecond Prizeを受賞。

第2回コミッション・プロジェクト

恵比寿映像祭における新たな事業として、国際的な発信および新しい文化価値の醸成を目的に、恵比寿映像祭2023から始まった制作委嘱事業が「コミッション・プロジェクト」。これまで構築した国内外のネットワークを活用し、日本を拠点に活動する新進アーティストを選出。国内外の審査員によってファイナリストとして選ばれたアーティストに制作委嘱した映像作品を、“新たな恵比寿映像祭の成果”として発表するものです。また、恵比寿映像祭2024より、コミッション・プロジェクトは3年サイクルで実施しています。1年目にファイナリストを選出、2年目に作品発表と同時に特別賞受賞者決定、3年目に特別賞受賞者による個展開催、さらには次のファイナリストを選出します。

[審査会] 沖啓介：メディア・アーティスト
斉藤綾子：映画研究者、明治学院大学教授
レオナルド・バルトロメウス：山口情報芸術センター[YCAM]、Gudskul Ekosistem キュレーター
メー・アードドン・インカワニット：映画・メディア研究者、キュレーター、ウェストミンスター大学教授
田坂博子：東京都写真美術館学芸員、恵比寿映像祭キュレーター

第2回ファイナリストの4名

小田香

ODA Kaori



1987年大阪府生まれ。フィルムメーカー／アーティスト。イメージと音を通して人間の記憶（声）——私たちはどこから来て、どこに向かっているのか——を探究する。2013年、映画監督のタル・ペーラが陣頭指揮する若手映画作家育成プログラム「film.factory」に第1期生として参加し、2016年に同プログラムを修了。ボスニアの炭鉱を主題とした第一長編作品《鉱 ARAGANE》（2015年）が山形国際ドキュメンタリー映画祭・アジア千波万波部門にて特別賞を受賞。2019年、メキシコにある水中洞窟を撮影した《セノータ》が完成。ロッテルダム国際映画祭ブライト・フューチャー部門で上映され各国を巡回。2020年、第1回大島渚賞を受賞。2021年、第71回芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞。2024年、最新中編「GAMA」（2023年）がMoMA Doc Fortnight、Cinéma du Réel、Festival du cinéma de Brive（SFCC批評家賞）など国内外の映画祭で上映された。

小森はるか

KOMORI Haruka



1989年静岡県生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了。映画美学学校フィクションコース初等科修了。東日本大震災後、ボランティアで東北を訪れたことをきっかけに瀬尾夏美（画家・作家）とアートユニットとして活動開始。2012年、岩手県陸前高田市に拠点を移し、人々の語り、暮らし、風景を映像で記録している。2022年より新潟在住。一般社団法人NOOK（のおく）に所属。主な作品に《息の跡》（2016年）、《空に聞く》（2018年）、《二重のまち／交代地のうたを編む》（2019年／瀬尾夏美と共同監督）、《ラジオ下神白—あのととき あのみちの音楽から いまここへ》（2023年）など。

永田康祐

NAGATA Kosuke



1990年愛知県生まれ。神奈川県を拠点に活動。自己と他者、自然と文化、身体と環境といった近代的な思考を支える二項対立、またそこに潜む曖昧さに関心を持ち、写真や映像、インスタレーションなどを制作している。近年は、食文化におけるナショナル・アイデンティティの形成や、食事作法における身体技法や権力関係、食料生産における動植物の生の管理といった問題についてビデオエッセイやコース料理形式のパフォーマンスを発表している。主な個展に「イート」（gallery αM、東京、2020年）、グループ展に「見るは触れる 日本の新進作家 vol. 19」（東京都写真美術館、2022年）、あいちトリエンナーレ2019（愛知県美術館）など。

牧原依里

MAKIHARA Eri



撮影：池田宏

1986年生まれ。映画作家・演出家。牧原は視覚と手話を中心とする人たちの身体感覚の視点から作品制作に取り組む。作品形態は映像、パフォーマンスなど異なるが、その作品から生まれる現象を可視化する装置を提供する。私たちの共通性と相違性を探り続けるとともにオルタナティブな概念とこの世界の社会構造を浮かび上がらせる試みを行っている。主な作品に《田中家》（2021年）、アート・ドキュメンタリー映画《LISTEN リッスン》（2016年）など。

開催概要

名称 総合開館30周年記念

恵比寿映像祭2025 Docs —これはイメージです—

TOP 30th Anniversary

Yebisu International Festival for Art & Alternative Visions 2025

Docs: Images and Records

会期 2025年1月31日（金）～2月16日（日）[15日間] 月曜休館

※コミッション・プロジェクト（3F展示室）のみ3月23日（日）まで

会場 東京都写真美術館、恵比寿ガーデンプレイス各所、地域連携各所ほか

時間 10:00–20:00（1月31日～2月15日／最終日〔2月16日〕は18:00まで）

※コミッション・プロジェクト（3F展示室）のみ10:00–18:00

（2月18日～3月23日／木・金は20:00まで）

主催 東京都／公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館／

日本経済新聞社

後援 J-WAVE 81.3FM

協賛 東京都写真美術館支援会員

料金 入場無料 ※一部のプログラム（上映など）は有料



東京都写真美術館外観

※諸般の事情により、実施内容などを変更する場合がございます。

展覧会などの詳細、最新の情報は恵比寿映像祭公式サイトをご確認ください。

会場構成（予定）

①東京都写真美術館

展示（コミッション・プロジェクト含む）

上映、イベント、シンポジウム、教育普及プログラム

②恵比寿ガーデンプレイス各所

オフサイト展示

③恵比寿地域文化施設およびギャラリーなど

地域連携プログラム



・恵比寿映像祭とは

恵比寿映像祭は、2009（平成21）年の第1回開催以来、年に一度恵比寿の地で、展示、上映、ライヴ・パフォーマンス、トーク・セッションなどを複合的に行ってきた、映像とアートの国際フェスティバルです。映像分野における創造活動の活性化と、映像表現やメディアの発展をいかに育み、継承していくかという課題について広く共有する場となることを目指してきました。近年では、地域とのつながりや国際的なネットワークを強化し、一層の充実と発展をはかっています。

・東京都写真美術館（TOP）総合開館30周年

東京都写真美術館は、2025年に総合開館30周年を迎えます。この30年の間に、写真や映像を取り巻く環境は大きな変貌を遂げています。恵比寿映像祭では、この変容する多様な映像表現を毎回異なるテーマにより、「映像とは何か」という問いを投げかけながら、国内外に芸術文化を広めてきました。写真・映像メディアの変容に着目し、幅広い作品群をイメージと言葉からひも解くことで、あらためて「ドキュメント／ドキュメンタリー」の再考を試みます。歴史的な名作から現代の作品まで幅広く展示し、30年の歴史を振り返りながら、未来への新たな展望をアーティストとともに描きます。

[プレスお問い合わせ]

恵比寿映像祭に関する取材、掲載、広報用画像等については、以下までお問い合わせください。

※報道・媒体関係者様のお問い合わせに限らせていただきます。

恵比寿映像祭2025事務局 広報担当（青柳、市川、齊藤）

TEL：03-6161-3144（平日10:00～18:00）

メール：press@yebizo2025.com

[恵比寿映像祭2025に関するお問い合わせ]

恵比寿映像祭2025事務局

TEL：03-6161-3144（平日10:00～18:00）

メール：info@yebizo2025.com

恵比寿映像祭公式サイト：www.yebizo.com